

三山歌臆断

辻 憲 男

中大兄近江宮御宇天皇三山歌

高山波 かぐやまは 雲根火雄男志等 うねびををしと 耳梨與 みみなしと 相諍競伎 あひあらしき 神代從 かみよより 如此尔有良之 かくにあるらし 古昔母 いにしへも 然尔有許曾 しかにあれこそ 虚蟬毛 うつせみも 孀乎 つまを
 相谿良思吉 あらしふらしき

(卷一・一三)

反歌

高山与 かぐやまと 耳梨山与 みみなしやまと 相之時 あひしとき 立見尔来之 たちてみこし 伊奈美国波良 いなみくにほら
 渡津海乃 わたつみの 豊旗雲尔 とよはたくもに 伊理比弥之 いりひみし 今夜乃月夜 こよひのつくよ 清明已曾 さやけかりこそ

(一四)

(一五)

右一首歌、今案不似反歌也。但旧本、以此歌二載於反歌。故今猶載此次。亦紀曰、天豊財重日足姫天皇先四年乙巳、立天皇為皇太子。

一

中大兄の三山の歌は、初期萬葉歌の中でもその達成において最も注目すべき作品の一つである。通説によれば、齊明天皇七年(六六一)の正月、西征の途次播磨の海を航行した時の作とされ、中大兄の唯一の、反歌を伴う長歌で

ある。中大兄の作歌は、他には「天皇賜鏡王女御歌一首」と題する「妹が家も継ぎて見ましを大和なる大嶋の嶺に家もあらましを」に云ふ、妹があたり継ぎても見むに」に云ふ、家居らましを」(巻二・九一)と、書紀の「君が目の恋こほしきからに泊てて居てかくや恋ひむも君が目を欲り」(二二三)しか知られない。前者は一説に孝徳朝の作とし、三山歌より早いと考えられるが、後者は同じ斉明七年の十月、天皇の喪葬帰京のために船が一所に泊てた時、哀慕して口号したと伝える歌である。作品の数はそのように少ない。しかし、あたかもこの年、額田王の、

熟田津に船乗りせむと月待てば潮もかなひぬ今は漕ぎ出でな

(巻一・八)

が、同じ旅の途次、一月と三月の間に歌われていた。そしてそれから十年の間は、額田王の作歌活動が最も旺盛に充実する時期である。即ち、晩年の持統朝の作(巻二・一一二、一一三)を除いて、天智朝に集中する額田王の主要な歌作は、言わばこの中大兄の三山歌とともに始まり展開していったように見えるのである(ただし私見では、一三・一四番歌は斉明七年より早く成立していたと考える)。このことはしかし両者の実際の婚姻関係云々とは関わりなく、何よりもまず初期萬葉の和歌史の最も重要な一齣としてとらえられなければならない。本稿の主題は第一に三山歌の解釈をめぐる周知の問題であるが、以て額田王論の周辺の一として位置づけようと思う所以である。

さて、三山歌の研究史を振り返ってみると、その主な論点は、

- (一)「雲根火雄男志等」の訓釈と三山の性別
- (二)制作年時、場所、事情について
- (三)反歌(一四)の「立見尔来之」の主格
- (四)一五番歌の位置づけ、「清明己曾」の訓釈

の四つに集約することができる。いずれも容易ならざる問題であるが、近年は、

(一)多く「畝傍を惜し(愛し)と」と訓み、畝傍を女山、香具・耳梨を男山とする。仙覚以来の、澤瀉注釈・岩波

古典大系本に代表される「畝傍雄々し」と説、即ち畝傍・耳梨を男山、香具を女山とするのは少数派である。

(二) 斉明七年一月、播磨での作とするのが通説化。

(三) 通説は播磨国風土記揖保郡条の伝説に見える出雲の阿菩大神とする。ただしこれと結びつけず、「印南国原」と取ることも可能か。

(四) 左注の不審にかかわらず、一三・一四と同じ時の作として考える。「清明」を「さやけし」または「まさやか」と訓み、「こそ」を希求の意とする。

といった傾向が認められる。ただしどの点においてもいまだ徹底化されない不明瞭な部分があるようにも思われる。以下では(一)と(二)の問題に絞って、一五番歌についてもいささか触れながら私案を提出してみたい。

二

まず一三番歌に関しては、私の理解は断然「畝傍を惜し(愛し)と」説に左袒する。畝傍山を女山とするわけであるが、この場合「雲根火雄男志等」の用字は何ら重大な妨げとはならない。もとよりこれは三山歌の書記者が選んだ文字ではないから、「雄男志」が本来も「雄々し」の意であったと考えねばならない理由にはならないからである。「雄男」の文字連続が表意性を持つか否かは、元来の畝傍山の性別如何とは別個に検討されるべき問題であろう。勿論、萬葉集では、「雄」の字は「荒雄」「ますら雄」「伴雄」「雄心」など、また「男」の字も「さ男鹿」「ますら男」「健男」「八十伴男」などと、男性たることを表わす用字例が多い。しかし「雄」の字を助詞の「を」に当てた例も少数ながらある。卷一には、

家呼毛名雄母(一)、見管行武雄・見放武八萬雄(一七)

の三例、その他には「船楫雄名三」(巻六・九三五)、「倭雄過而」(巻十三・三三三三三)、「不恋有益雄」(巻三・四三六)、

「鴨二有益雄」(巻四・七二六)、「吾恋南雄」(巻十一・二七六七)の五例である。巻一のいわゆる原撰部(一〜五三番)に限って見ると、助詞は「乎」字が圧倒的に多く、「呼」「遠」が各一例を数えるのみである。右の三例(一、一七)はかなり特異な例であり、一三番歌がこの一七番歌に近接して載ることは注意してよい。即ち「雲根火雄」で切れるといふ見方は可能である。一方、「男」の字も、「片念男責」(巻四・七一九)、「海部尔有益男」(巻十一・二七四三或本歌)のように助詞に用いた例もあり、必ずしも表意的であるとは限らない。集中の「惜し」の仮名書き例は多く「乎思」「乎之」で(他に「遠志」「怨之」)、この「男志」は唯一例となるが、たとえその「男」の文字に意義を認めるとしても、それが即ち山の性別を表したことにほならない。「雄―男」の連続は確かに連想が働いた結果であろうが、それとても「雲根火」と同じく仮名表記上の意味を持つものではない。⁽¹⁾

それに関連して注意すべきは「高山」^{かぐやま}の用字である(反歌一四にもある)が、これも香具山が現実には高い山だからではなく、「高」の上古音が宵部(ㄱ)に属した故にカグに当てたものと考えられている。⁽²⁾集中には「香山」の表記が三例あり(巻三・二五九、二六〇、巻十一・二四四九)、記紀にも「香山」「天香山」と記す。「香」は陽部(ㄱ)に属し、カグのほかにかが・カゴの音を表わす。ただし「高」も「香」も好字意識による用字であろう。

さて、最初の一文、

香具山は 畝傍ををしと 耳梨と あひ争ひき

は、唯一三山相闘の伝説の内容を語った部分である。作者が冒頭にこのように歌った時、普通に考えて、第二句の「畝傍ををしと」にどのような意味を担わせるであろうか。伝説の骨子は「香具山は―耳梨と―あひ争ひき」であって、その妻争いの直接の原因を述べるのが「畝傍ををしと」の句であったらう。この部分は結果として「あひ争ひき」の事態に及んだことについての、畝傍に関する単純明快な説明でなければならぬ。そのような文脈からして、ここは畝傍の性状を表わす「雄々し」のような間接的理由ではなく、争いの直接的原因たる畝傍に対する香具

山の態度（なぜ争ったのか、その「動機」）が述べられるべきところであろう。即ち「畝傍を惜し、（愛し、）と」のように、まず香具山の心的契機が根本にあつて始まったというのが順当な説明であろう。これがもし「雄々し」ならば、畝傍（の山容²）の特性を語ったことになるが、果してそのような性状のことがこの叙述にとって必須の要件であるか。よく知られたストーリーゆえの略筆という見方もあるが、単に「雄々し」と思ったことが争いの主因になるのかどうか、説話としても間隙があるように思われるのである。一体「雄々し」のような形容詞は、対象を或る基準において認識した時に意図的に選ばれる観念語である。それは山の山に対する心意として適当な語彙であるとも思えない。もし仮に「畝傍雄々し」とした場合、香具山は耳梨をば（比較的）雄々しくない山だとして疎んじたことになるが、「神代」に果してそのような心理的葛藤劇が構想され得たであろうか。⁽³⁾ またその場合は、耳梨からすれば、新たに登場した畝傍と争ったというのが成り行き上興味の中心であろうのに、それをへ畝傍ニ心ヲ移シタ香具山ハ、以前カラ言イ寄ッテイタ耳梨ト争ッタとだけ述べたとするならば、これをいわゆる痴話喧嘩の類に矮小化することになる。先の香具と耳梨の言い交わしも、その後の心移りも言わずに、そのように三段階の時間がこめられていると見ることも無理であろう。しかもすでに指摘されているように、それでは下の「媼を争ふ」の争いと意味を違えることにもなる。前段に香具―耳梨（女―男）の争いを述べ、転じて結句でうつせみの媼争いのことに及ぶというのは、いかにも伝説の素朴さからは飛躍した叙述ではあるまいか。⁽⁴⁾

そもそも「香具山は」と歌い始めたのは、それが話の中で中心的役割を担った山だったからである。しかもこの単刀直入な導入は伝説の主題に一致するだけでなく、巧まずして作者の心意（心情的立場）とも一体化しているのではないか。原始古代においても男ばかりが「つま争い」の主導権を握ったとは限らないが、かと言って中大兄の心を動かしたのが男女争闘の話であったとも思われない。⁽⁵⁾ 作者はやはり「あひ争ひき」「あひし時」の神話的時間に思いを致し、「香具山は」にみずからを投影して感慨を催しているのである。これに「天の」を冠しないのは単に

音数だけの問題ではあるまい。集中の、

天乃香具山（巻一・二二）、天之香来山（巻一・二八）、天之芳来山（巻三・二五七）、天之香具山（巻七・一〇九六）、天
 芳山（巻十・一八二二）

などの神話の山としての観照的风景とは違って、そこに孀を争った（と擬人間化された）香具山に対する感情移入が認められよう。うつせみのわが身も「孀を争ふ」人間である故に、おのずと香具山への共感が生まれたのである。作者の関心事はまさに「耳梨とあひ争ひき」という孀争いのこと以外にはなかったのである。⁽⁶⁾

三

さて、巻一の「後岡本宮御宇天皇代天豊財重日足姫天皇位後即後岡本宮」の標下には、

額田王歌

（八）

斉明七年（六六一）

幸三子紀温泉ニ之時額田王作歌

（九）

斉明四年（六五八）

中皇命往三子紀温泉ニ之時御歌

（一〇）（一一）

同？

中大兄近江宮御宇天皇三山歌

（一二）（一三）（一四）（一五）

斉明七年（六六一）？

の八首が並ぶ。厳密な年代順ならば八番の熟田津の歌が最後に来るところであるが、そうっていないのは、この前後、原資料において、七、八、九、……一六、一七、一八と額田王の歌が連続していた間へ、中皇命作・中大兄作の二歌群を補入したというような事情があった故であろうか。即ち、中皇命の三首は九番の後へ紀温泉行幸の關係歌として付加され、また三山歌は当初から制作年時不明の歌として斉明天皇代の最後に置かれたのもあろうか。一五番の左注の、

亦紀曰、天豊財重日足姫天皇先四年乙巳、立天皇ニ為ニ皇太子。

の一条は、今の場合ほとんど意味のない注である。題に「中大兄」とあるのを皇太子時代の作と解して、上限を示したつもりなのだろう。少なくとも加注者は斉明七年西下時という理解はしていなかったものらしい。そして、おそらくもとの編纂者にも三山歌を八番の前に補入するとか、または八番をこの後に移すとかいった考えはなかったようである。(それにしても八↓九の順は不審。九番には左注がなく、一〇〜二番の左注にも作歌年時を記さない。編纂時から八だけが分明で、九や一〇〜一二、一三〜一五は年時不明であったものか。)

いずれにしても、配列順を手がかりに三山歌の制作時期を特定することは難しい。しかし、標目を外して考えてよければ、(元来標目の存在しない)孝徳天皇代の作という可能性も考えられよう。巻二の鏡王女に賜うた歌(九一)は孝徳朝の作とも言われている。むしろ、妻争いの主題と中大兄の年齢(大化元年〔六四五〕二十歳、白雉五年〔六五四〕二十九歳、斉明七年〔六六一〕三十六歳)とのつりあいを思えば、三山歌も比較的若い時の作とするほうが自然だとは言えまいか。「うつせみも婦を争ふらしき」の言は現在に妻争いを経験している当事者の感慨として読める(過去の体験を想起しているのかもしれないが、その現実があったと見るべきだろう)。仮に斉明七年として、それが果して、天皇の率いる、国運を賭した百濟救援の軍船の上で、実際上の執政者たる中大兄の持つべき性質の感想であったかどうか。その「婦」にたとえば額田王を当て、自らをさして「うつせみも婦を争ふらしき」などと歌うことが、この時期に(個人的にも状況的にも)あり得たことであつたかどうか。

現在、三山歌の詠作場所は、一四に「印南国原」、一五に「渡津海の豊旗雲」が歌われていることから印南野ないし播磨灘とするのが一般である。これは澤瀉久孝「香久山は畝傍ををしと」(『萬葉古徑二』)に、

即ちこの三山の御歌は、天智天皇が皇太子として斉明天皇の西征に供奉せられて印南野を過ぎ給うた折のものであり、女帝でおはした斉明天皇のその折の供奉には、大海人皇子の妃であつた太田皇女をはじめ、女人の従ふもの多く、かつて大海人皇子の寵を得て十市皇女を生み奉つた額田王も加はつてをり、御作者はこの頃より

この人と御心を通はず御仲となられてゐた。さうした折、播磨風土記に伝へる三山相闘の物語に興を催され、阿菩大神が止まり給うたといふ印南国原に立たれての御感懐がこの御詠となつた事とわたくしは考へるのである。

としたのに始まるが、しかし西征時が「最も自然な推定」であるという以外、特に積極的な根拠が示されたわけではない。もとより額田王との關係を前提にすることも疑わしい。

孝徳紀にも斉明紀にも印南野行幸の記事はないが、中大兄自身は大化以後白雉四年まで難波宮にいたから、その間に播磨へも行き、あるいは行かずとも三山の伝説を耳にすることは十分あつたのではなからうか。憶測を述べれば、書紀大化三年（六四七）十月に、

天皇、有間温湯に幸す。左右大臣・群卿大夫、従なり。

とあることに関連づけることも可能であろう。⁽⁷⁾ けだし作歌動機の間からは、この前後、

皇極三年（六四四）正月　かつて蘇我倉山田石川麻呂の長女を身狭臣に偷まれ、かわりに少女を妃とした

大化元年（六四五）九月　倭姫王の父古人大兄皇子を滅ぼす

五年（六四九）三月　造媛の父石川麻呂を滅ぼす

など、中大兄自身に直接に関わる事件が相次いだことが注意されるからである。中でも石川麻呂の長女の事が影を落としているのかもしれない。中大兄には皇后倭姫の他に、嬪四人と宮人四人がいたという（天智紀七年条）。皇子女は十四人で、年長者には大田皇女（六四四年以前生）・鷗野皇女（六四五年生）・大友皇子（六四八年生）らが、年少者には川島皇子（六五七年生）・阿閉皇女（六六一年生）⁽⁸⁾らがいる。その長幼の差は二十年近くあるが、父たる年齢から見ても、最も遅い斉明朝後期に妻争いの事実があつたとは考え難いのであるまいか。ましてやその相手をひとり額田王として、三つの山に現実の人間關係の寓意を読み取るなどは、私小説的な想像が過ぎた説のように思われる。

ところで、齊明紀には、

七年の春正月の丁酉の朔壬寅（六日）に、御船西に征きて、始めて海路に就く。甲辰（八日）に、御船、大伯海に到る。

とあり（八番歌左注にも引く）、播磨灘航行（停泊？）は七日のことと考えられる。暦日のとおりであれば、月は上弦で午前中に東の空に出て夜半に沈む。それではしかし、入り日を見て今夜の月明を思う一五番歌にはあまり適当な月とは思われない。晴れていれば日没時に南の空に白く見える月である。ところがこれが満月であれば日没とともに、東の空に出て、翌朝の日の出まで一晚中照らす月夜になる。無論「清明」の語は満月にのみふさわしいわけではないが、「今夜乃月夜」の言葉にはいや増しの期待感が込められていよう。一五は、あるいはこの数日後、「庚戌（十四日）に、御船、伊予の熟田津の石湯行宮に泊つ」とある、満月の頃の作と理解すべきであろうか。これは直感に過ぎないが、「今夜の月夜清明こそ」の氣息声調は、かの「船乗りせむと月待てば潮もかなひぬ」（八）の呼吸に一脈通じるものがあるようにも思われる。

このように考えた場合、一五番歌についての左注、

右の一首の歌は、今案ふるに反歌に似ず。但し旧本に、此の歌を以て反歌に載す。この故に今も猶し此の次に載す。

はやはり尤もな不審であることになろう。第一に、一五を必ず一三・一四と同時同所の作とすべきいわれがない。第二に、反歌を二首以上伴う長歌は、巻一・巻二では、

近江荒都歌（二九〇～二九一）、安騎野の歌（四五〇～四五九）、石見相聞歌（二二二～二二三、一三五～一三七）、日並皇子挽歌（一六七～一六九）、明日香皇女挽歌（一九六～一九八）、高市皇子挽歌（一九九～二〇一）、泣血哀慟歌（二〇七～二〇九、二一〇～二一一）、吉備津采女挽歌（二二七～二二九）、石中死人歌（二二〇～二二二）

など、持統と文武朝の人麻呂作歌まで例がない。天武朝以前では、唯一、伝承歌の岡本天皇御製歌（巻四・四八五、四八六、四八七）が反歌二首を伴う例であるが、舒明朝の中皇命の宇智野遊獵歌（巻一・三、四）や軍王作歌（存疑五、六）も、天智朝の額田王の三輪山の歌（二七、一八）も、反歌は一首のみである。伝承歌を別とすれば三山歌だけが明らかに例外となるのである。なお三輪山歌に付いた井戸王の和歌（一九）の左注には、

右の一首の歌は、今案ふるに和ふる歌に似ず。但し旧本に、此の次に載す。この故に猶し載す。

とあって、一五の左注とほとんど同じ構文である。一五の場合も、もとは一三・一四に対する「和歌」であったとする想像が成り立つかもしれない。⁽⁹⁾しかし月夜の清明は、いかようにも妻争いの伝説の歌と一体の作品として主題的な統一性を持っていない。印南国原と渡津海とが神話的モチーフの故に結ばれ得るなどというのは、些か強いた合理解であろう。一五は三山歌とは関わりのない、ただ「旧本」に中大兄作として一括されていただけの独立短歌だったと考えたいのである。

四

額田王、思近江天皇二作歌一首

君待登 吾戀居者 我屋戸之 簾動之 秋風吹

（巻四・四八八）

鏡王女作歌一首

風乎太尔 戀流波乏之 風小谷 将_レ来登時待者 何香将_レ嘆

（四八九）

巻四のこの二首は巻八にも同様に並んで重出している（一六〇六、一六〇七）。二首一組で伝来したことを物語るものだが、本来は唱和の歌であったかどうかは疑問である。題の「鏡王女作歌一首」が端的に前歌と応和・贈答の如き関係ではなかったことを示している。額田王の歌は独詠的自己完結的であり、まして近江天皇を待ち恋う思い

をあえて鏡王女に贈り遣るといふ必然性も全くない。⁽¹⁰⁾ただ「風をだに恋ふるはともし」は何らかの前件を踏まえた表現であるから、風を共通の素材として、時日を遅れて和した歌と見るのが穏当であろうか。前歌に中国詩の影響があったとすれば、王女の歌にもこれに誘われて文芸を楽しむといった側面があったのかもしれない。あるいは、かの春秋競憐歌（巻一・一六）が詠まれたような文雅の宴における競作の二首でもあったのだろうか。

卷四冒頭部分の配列は、この前後、

難波天皇妹、奉_下上在三山跡_二皇兄_上御歌一首

(四八四)

崗本天皇御製一首并短歌

(四八五、四八六、四八七)

額田王、思_二近江天皇_一作歌一首

(四八八)

鏡王女作歌一首

(四八九)

吹_二茨刀_一自歌二首

(四九〇・四九一)

田部忌寸櫛子、任_二大宰_一時歌四首

(四九二・四九五)

の如くである。「近江天皇」の称が「難波天皇」「崗本天皇」と同様の呼称法であること、また吹_二茨刀_一自_二十市皇女_一と関わりがあり（巻一・二二）、櫛子歌の舍人吉年（四九二の注）が額田王とともに天智挽歌の作者であること（巻二・一五二）からも、これらが連続した原資料に存在したことは推測されよう。⁽¹¹⁾それ故、題の「近江天皇を思ひて作る」を単なる伝承として片づけてしまうことは、逆にこれを以て額田王個人が天智に寵愛された証と解するのと同様に、正しい方向の議論であるとは思われない。額田王の才能が中大兄によって開花したかどうかは、本来萬葉和歌史上の問題であって、いわゆる私的な婚姻関係の有無がそれと本質的な関わりを持つわけではないと考えるからである。たとえ結婚の事実があったとしても、だからと言ってこの「君待つと」の歌のすぐれた抒情性までが直ちに獲得され得るといふものでもあるまい。ともかくここでは、春秋競憐歌や蒲生野の歌を頂点とする額田王の

主要な歌作が、他ならぬ中大兄の主導した宮廷文芸隆盛期（懷風藻序に言う天智朝近江朝）に集中して生み出されていることを強調しておくだけで十分であろう。

〔注〕

(1) 近年、「畝傍雄々しと」を取る説として、中西進氏『万葉集 全訳注 原文付』、稲岡耕二氏『鑑賞日本の古典万葉集』、毛利正守氏「一三番『高山波雲根火雄男志』の解釈をめぐって」（美夫君志、第三十四号）がある。なかでも稲岡氏は「雄男」の文字連続に注目して、「もちろん、『万葉集』の仮名は、必ずしも字義が生かされている例ばかりではないから注意しなければならないが、ヨに当たる仮名は他にも乎・遠・緒など少なくないのに、わざわざ雄・男と二つながら男性を想像させるような文字を重ねてこれを書いているのは、巻一の筆録者が、この部分を「雄々し」と解していたためではないか、と推測されよう」とされる。巻一の用字傾向は上述の如くであるが、「雲根火雄男志等」は、助辞部分以外では当歌唯一の仮名書きの箇所なので（反歌では「伊奈美（国）波良」、一五番歌では「伊理比弥之」が仮名書き）、助詞に「雄」を用いたあとへ連想が働いて「男」を選ぶことは十分にあり得る。それならば畝傍の性別とは別問題であろう。なお「雲根」の用字は、「雲飛山」（巻七・一三三五）のように、「雲」が臻撰文韻 n 音尾の文字ゆえウネに当てられた（鴻巣全釈）と

いう例もあり、これはそれを「雲―根」の二文字で表記したものである。毛利氏の挙げられた漢籍の「雲根」の用例はその上で考慮されるものであろう。地名の字音の例は本居宣長『地名字音転用例』に挙げる。

(2) 『萬葉集美夫君志』『萬葉集字音辨證』。岩波古典大系本補注。

(3) 仙覚『萬葉集註釈』に、「ミ、ナシヤマ、ハシメニカクヤマヲケシヤウスルニ、ナニトナクウケヒクケシキナリケリ。ソノ、チニ、ウネヒノ山、又カク山ヲケシヤウスルニ、ウネヒノ山ハスカタモヲ、シク、ヨカリケレハ、コレニ心ウツリニケリ。ヨ、シキトイフハ、ケタカクヨキ也。サテミ、ナシヤマ、サキノヤクソクニマカセテ、アハントスルニ、カクヤマウケヒカス。ウネヒノ山コレヨキ、テ、トモニタ、カフ」とあるが、すべて香具山の感情（心理）に左右された争いと見るところ、かえって後世風を感じさせる。また耳梨を女山として、二女が畝傍を取り合ったとする説（折口口訳）は、他に比較すべき男山がないのに畝傍を「雄々し」と思ったことになり、「あひ争ひき」の原因の説明としてやはり不自然なように思われる。

(4) 澤瀉注釈に「畝火の雄々しさを持たぬ耳成を男山として

その二つの男山を眼前に眺めて、耳成に對する不満を抱きそめた女性、香具山の心理が、この「雄々し」との語に示されてゐると云へないであらうか。「香具山から近い位置にある耳成にまづ云ひ寄られた香具山が、後にやゝ距たつた位置にある雄々しく美しい畝火へ心を移すといふ、それだけの物語性——なほいへば女性の本能、それも近代の頽廢的なものでなく、もつときわやかな遅い本能の目覚め——」云々とあるが、「雄々し」のような感情的觀念的印象に基づいて異性を評価する恋愛心理は、文學的に洗練されたレベルのもので、單純率直な神話的心性とは異質のものではないかと思う。

(5) 住吉大社神代記に載せる説話では、為奈川・武庫川の女神がともに住吉大神の妻になろうと「寵愛の情」を成し、而して為奈川の女神は「嫡妻の心を懷きて嫉妬を発し」て武庫川の妾神を攻撃したという。また世阿弥の謡曲「三山」は、香具山の男が畝傍の桜子に心を移したので、嫡妻の耳梨の桂子が「うはなり打ち」をするという設定である。これらは二女の争いではあるが、男女争鬪の話ではない。

(6) 卷十六冒頭の桜児の説話では、二壮士が「共に此の娘を誂ひて、生を捐てて格競ひ、死を貪りて相敵る」とあり、ともかく娘子を得ようとの心が唯一の「動機」であつたことを語る。また葦屋の菟原処女の伝説歌でも、「すすし競ひあひ婚ひしける時には」「立ち向かひ競ひし時に」「ますらをの争ふ見れば」「もころ男に負けてはあらじと」(虫

麻呂歌集、卷九・一八〇九)、「うつせみの名を争ふと玉きはる命も捨てて争ひに妻問ひしける」(家持、卷十九・四二一一)など、二壮士の激しい獲得競争が話の中心になつてゐる。

(7) 制作時期について注釈史をたどれば、山田孝雄『萬葉集講義』が、「吾人を以て見れば、この御詠は中大兄皇子まだ皇太子におはしまさぬ時播磨国にいまし印南の地にてこの伝説をきこしめし、甚だ面白きことをききつるよと思し召し、はるかにかの日常目馴れたまひし三山を思ひやりたまひてこの御詠ありしならむ」としたのが最も早い。これを批判したのが澤瀉説で、その後、土屋文明『萬葉集私注』、阪下圭八氏『初期万葉』、稻岡耕二氏『鑑賞日本の古典万葉集』、伊藤博氏『萬葉集全注卷第一』など、同調するものが多い。ただし「或は斉明天皇七年の行幸の折の作かと思はれる」(私注)、「斉明七年正月、百濟救援のため西征の途次に成つたとしてよいであろう」(阪下氏)、「斉明七年、西征の船団が、播磨国印南地方を過ぎた時に、中大兄皇子が作った歌と考えられる」(稻岡氏)、「皇太子の予祝に始まり天皇の予祝でまとめられたこの緊張した構図は、一三〇一五番歌が斉明七年(六六一)の西征の途上の歌であつたことを告げるといえよう」(伊藤氏)とあるのみで、新たな論拠が示されたわけではない。なお山田説がなぜ立太子以前とするのか不審であるが、あるいは舒明十一年(六三九)十二月の伊予湯宮行幸に随行した折と

でも考えたものだろうか。ならば十四歳の作である。

(8) 他の子女は生年未詳。推定可能な者のみ記せば、天武妃となつた新田部皇女は、舍人皇子(六七六年生)の母であるから、遅くとも斉明朝の生まれ。山辺皇女は大津皇子(六六三年生)の妃なので、大体同年輩であろう。志貴皇子は天武八年(六七九)の吉野誓盟に成年に達していたとされる。天智朝の生まれか。比較的長寿なのは泉皇女(七三四年没)と水主皇女(七三七年没)。

(9) 中西進氏『万葉集の比較文学的研究』に、一五が額田王の作である可能性を示唆する(一一八頁)。

(10) 澤瀉注釈は四八九について、「待つといふもののないこの身のあぢ気なき、風にも心のゆらぐお心が羨ましい、といふ余情をこめたもので、即ちこの作は作者の夫鎌足の死後のものと思はれる」と推測するが、作者の境遇に少々引きつけ過ぎた理解ではなからうか。鎌足は天智八年没で、「天智九年か十年の秋」の作となると歌意が露骨に現実的すぎるのである。また、そのような境遇の鏡王女(かつて中大兄にも寵せられたという)に額田王が「君待つと」の歌を示すなどということも考え難い。

(11) 卷八でも秋相聞のこの二首のあとには弓削皇子御歌(一六〇八)が続き、秋雑歌の冒頭には岡本天皇御製歌(一五一)が置かれている。弓削皇子は額田王と贈答をなした(卷二・一一一〜一一三)。

(一九九二年九月二十日)